

四字動詞の研究

野 島 啓 一

Abstract :In this paper the word formation of four Sino-Japanese words is analyzed. It is claimed that the internal structure of two Sino-Japanese lexical items are suppressed and that the opaqueness of this relationship allows adjunction of the two Sino-Japanese lexical items to bear a grammatical function different from original functions. Also brought to light is the fact that pragmatic factors such as means-role and categorical classification guarantee the formation of these four Sino-Japanese words. Finally, it is shown is that technical terms as nouns often prove to be the starting point for part of speech transformation in which nouns increasingly begin to function like verbs.

キーワード：文法関係のリセット・新しい役割・名詞派生型

「自己紹介する」のような四つの漢字からなる動詞を分析対象にする。この漢字四つよりなる動詞(=以後、四字動詞)でも、「整理整頓」のような元来は名詞用法が主であったものが「する」の添加により四字動詞として認知されたと想定される場合も検討対象にする。名詞を動詞化することによる動詞の形成は英語にもみられる。「整理整頓する」のように「を」の格助詞をとらない場合、「整理整頓」の単位は動詞の「する」に対して目的語の関係を維持できるのか、それとも「作業場を整理整頓する」のように新たな目的語の機能を果たす名詞をとり、動詞の地位を確立しているかの観点を検討する。これに関して、四字動詞は、新たな目的語をとり謂わば機能を拡張しているとみる可能性がある時の機能的・意味的特徴も調べる。

結論として、「整理整頓」のような元来、名詞と考えられる表現に「する」をつけた場合、「を」をとらない「ゼロ」型の場合では、語幹の四字名詞の内部構造で、意味や統語関係の不透明化により新たにひとつの概念としてリセットされた動詞が形成されていると主張する。「整理する」、「整頓する」は語根の構成部分が意味の関係において不透明化していると解釈されるが、「整理整頓する」でも、「整理」と「整頓」の構成要素が特に意味概念に関して「重複」とい

う意識が少なくなり、二つの漢語からなる謂わば二字動詞に対して、新しいタイプの動詞を形成していることを指摘する。

まず、本稿の基礎データとなる四字動詞は筆者自身が採集したデータベースに基づく。ⁱ 先行研究などを参考に、まずその内部構造を概観する。次に、対象となる動詞の選定基準をのべ具体例を検討しながら、その四字動詞としての成立条件を考える。

この四字動詞では最初の二語が一つの語彙項目をなし、残りの二語も単独で一つの語彙項目をなすものを対象に検討する。ⁱⁱ 第一のタイプとして「自主運営」を調べる。この語は「自主的に運営する」という修飾機能をもつ副詞と動詞とからなる動詞句が圧縮されてできた表現と考えられる。名詞という範疇に入る証拠として「この施設は自主運営だ」のように断定の助動詞「だ」を伴うことがあげられる。ⁱⁱⁱ 第二のタイプとして「自己描写」を取り上げる。ここでは、後半の二字漢語(=「描写」)が動詞の機能をもつと想定した場合、「自己を描写する」のように前半の二字漢語(=「自己」)はその目的語の機能を果たしていると考えられる。所謂、「項」関係が成立している。^{iv,v} 第三のタイプとして「比較検討」を調べる。これは、「比較」と「検討」という二語の漢語が並列する関係にある表現である。「比較検討」は品詞分類としては「比較検討の結果」というように名詞に分類可能に見えるが、「この分析結果は比較検討だ」のような表現が不自然なので、やはり「比較する」・「検討する」という動詞の結合した複合動詞「比較・検討する」から派生していると考え、名詞機能をもつとはいえ、動詞用法が主となっている。この点で「先制攻撃」のような表現は「先制的に攻撃する」という動詞句を基底に派生するよりも「先制する」・「攻撃する」という動詞の並列複合化による「先制・攻撃する」を基底に派生した名詞の表現と規定しやすい。なぜなら、「この局面では先制攻撃だ」というように表現が確立しているから。第四のタイプとして謂わば、熟語としての表現を取り上げる。「切齒扼腕」がこのタイプに該当する。この表現は動詞句の連続の漢文に由来するが、^{vi} 現代では名詞の用法が確立している。しかし、以下の用例は他動詞用法としての四字動詞の例である。

例1 「ジミー佐古田氏を切齒扼腕させる。」『日米合同捜査』

四字の漢語表現がどのように成立したかが四字動詞としての用法が確立しているかの予測に有力な手がかりとなる。この観点から、更に検討を重ねる。第一のタイプの「副詞+動詞」からなる動詞句を四字動詞の基底に考えられる型では、自動詞用法、他動詞用法とも可能である。但し、動詞の意味内容によりどちらかの用法に限定されることもありうる。

例2 人間関係などを総合判断して、... 『翻訳という仕事』

例3 ソフトが標準搭載されていない場合... 『インターネットを使いこなそう』

これらの表現では、四字動詞が基底に想定した動詞句から直接形成されたと考えなくて、名詞

用法の確立の後に、この用法ができたと考える根拠は直感にもとづいている。更に、動詞句を基底にする表現でも、新たに目的語をとっている事はその四字の漢語からなる表現を単位としている事を示す。そして、その四字の表現それ自体は単独では動詞として認知しにくい、名詞表現としては文法的であるという言語直感にもよる。つまり、目的語を新たにとって四字動詞として成立しているとみなす事ができる。^{vii}

例4 彼らは石油を集中攻撃することを望んだ。

『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』

例5 ...主要都市を完全破壊する... 『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』

例6 そうした努力を停止あるいは方向転換するには、...

『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』

例7 小さな軍事施設を写真撮影する技術を開発し、...

『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』

例8 社員を自宅待機させたり...

日本経済新聞

例4の「集中攻撃する」は「集中的に攻撃する」を短絡させた表現で確立した四字動詞とみなし難いとも考えられる。一つの根拠として、目的語なしには動詞と認定しにくいことによる。例5の「完全破壊する」も「完全に破壊する」を短絡させた表現で、確立した四字動詞とみなし難い。逆に、各々、目的語をとることで動詞としての条件を満たし結果的に四字動詞としての認識が形成されるという解釈の仕方が可能である。例7の「写真撮影する」は動詞とその目的語を反映した動詞句の構造を持っており、その意味的な関係も文字通りのままであり、その分新たに目的語を取り難いはずである。これに対する分析の方法は二つある。まず、「写真撮影」という表現自体は名詞用法と考え、そこから動詞用法が確立したという解釈の仕方である。項関係を反映している分、動詞用法の確立が動機づけられるという考え方である。次に、「写真を撮影する」という表現を短絡させたものとみて、目的語を新たにとることで逆に四字動詞として確立するという考え方である。例5を例とした副詞+動詞からなる動詞句を起源とする見方と違って、このタイプでは第一の解釈がよいように思われる。その根拠として、次のような表現では単に「撮影する」という表現が自然であるという理由による。^{viii}

例9 写真を撮影する技術として、

例10 この花を撮影する際には、

例11 小さな軍事施設を写真撮影する技術を開発し、...

『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』

例10では、目的語が単に一本の花のような普通の場合、「撮影する」という動詞で十分である。一方、例11では、例えばスパイ衛星などの特別な手段を使うというような状況設定が可能な場

合、「写真撮影する」という動詞はその「手段」という状況に依存した意味機能をもつということがどこかで認識されている必要がある。「写真撮影」という名詞レベルで「手段」という類の状況的意味が付加されていると考える見方がある。この考え方にたつと、名詞表現から四字動詞が派生したと考えることができる。反対に、「写真を撮影する」という動詞句の表現から四字動詞が派生したという見方にたつと、四字動詞には新しい状況的な意味を付与するという必要性を検討しなければいけなくなる。副詞＋動詞の型を元にした四字動詞と目的語＋動詞（＝動詞句）の型を基にした四字動詞とでは当然意味的な差異がある故に、四字動詞のレベルで例えば状況的な新しい意味を统一的に付与する必然性はいまのところ見つかりにくい。従って、「写真撮影する」に絡んだ議論は名詞表現から派生した四字動詞の型を成立の特徴とする見方が根拠があるようにみえる。

更に、名詞表現に由来する四字動詞の特徴として自動詞用法はあるが他動詞用法が必ずしもあるわけではないことを具体的に検討する。

例12 国際結婚した人、... 『とまどう日本人』

例13 「水」による再転化へと二転三転しただけである。 『「空気」の研究』

例12では「国際結婚」は「国際的に結婚する」という表現からの派生とは考えにくい。「国際的に」＋「結婚」という所謂、付加詞（＝adjunct）＋名詞の関係から派生したという見方も考えられる。しかし、「国際的な」は「地球規模の」等という独自の意味をもっていて修飾関係から派生したとは考えにくい。従って、「国際結婚」という結婚形態を表す一つのタイプである名詞表現が動詞用法を確立させたとみる見方ができる。例13は「二転三転」という比喩的な意味をもつ熟語型の四字動詞である。「二転して三転する」という意味的に並列関係にある動詞表現は少なくとも現代語では設定し難い。「二転三転」という「無秩序な状態」を表す名詞表現がその比喩的意味での動詞表現を確立させているとみる見方ができる。

逆に言えば、名詞表現に由来すると考えられる四字動詞が目的語をとっていればその四字動詞の用法は確立しているといえる。

例14 これを同時通訳するということは、 『翻訳の原理』

例14で「同時通訳」という表現は「同時的に通訳する」という副詞＋動詞の関係を反映した表現と考えるよりも、そのような状況を四字の漢語で表すという以上の文法的な関係を想定しにくい。「同時に」・「同時的」という表現自体が単独では「同時通訳」の「同時」とは違う意味であることが根拠の一つとなる。だから、目的語をとることは四字動詞の用法が確立している論拠となる。

では、「和文英訳する」や「武装解除する」のように、動詞句を想定した派生が可能な型と四字名詞に由来する四字動詞の型とでは造語能力に差異があるだろうか。具体的には、動詞句

の想定が可能な派生の型の方が四字動詞になりやすいのかという問題である。動詞の想定が可能な四字動詞はその受身形も特に制限なく使えることは次の例文からも推察できる。

例15 各地の消防署へ配置転換されていたので、... 『日米合同捜査』

例16 大量印刷されて 『「在外」日本人』

例文15のように派生前に「配置」を動詞「転換する」の目的語(＝内項)と解釈できる場合も、更に例16のように「大量」を「印刷する」の修飾機能をもつと解釈できる場合にもその受身表現には文法的な問題が生じてこない。次の例17のような修飾語的な機能(＝限定用法)はこの型の表現が確立していることを示している。詰まり、その四字動詞が本来の自動詞・他動詞と同じ出現状況にあることを示している。

例17 まるで映画監督に演技指導される俳優のように... 『アメリカのジャーナリズム』

次に、四字名詞に由来すると考えられる四字動詞の場合を考えてみる。次の「水平分業」は分業の類型の一つを示す専門用語であり、品詞は名詞である。しかし、その用例は四字動詞として使われている。

例18 水平分業できるだけのパワーがついてきた。 『マルチメディア』

「できる」がつけば動詞である基準には必ずしもならないが、^{ix}「する」をつけて「水平分業する」と自動詞用法が可能である。

例19 若い女の射殺死体が司法解剖された。 『リヴィエラを撃て』

例19の「司法解剖」も法律上のある概念を表す専門用語であり、名詞である。しかし、受身表現は動詞用法が確立している証拠にもなる。

例20 世代交代しながら 『「在外」日本人』

例20では「世代が交代する」という自動詞構文の表現から名詞が形成され、更に四字動詞としての用法が確立したとみる見方ができる。「世代を交代する」という動詞句は自然な日本語としては想定されにくいと思う。

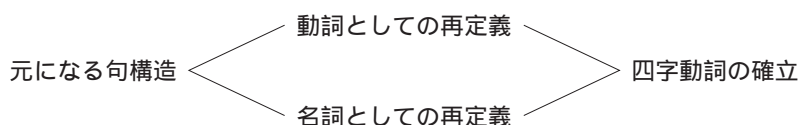
例21 アメリカ兵を生体解剖したのは... 『発語訓練』

例21では「生体解剖する」という四字動詞が使われている。この「生体解剖」とは戦時中にアメリカ軍の捕虜を大学医学部の教授が生体実験をした事件をさす時にマスコミなどで使われた言葉である。「生体を解剖する」という動詞句からこの四字動詞が派生したと考えることもできるが、当時のセンセーショナルな出来事をさす見出し語的な要素が強い。即ち、名詞の表現から派生した四字動詞が確立しているとみることができる。

以上の検討から実際の用例を見る限り、本来の動詞の意味を解釈できるタイプとまったく出来ない名詞由来の表現との間には、四字動詞の用法の可能性についての差はないように見える。用法が確立しているか判断には①個人の直感的判断②目的語をとるか等の各種の文法的テスト

③統計的な調査が必要である。^x更に、この研究では四字動詞の用法の確立を実際の文などでの使用例にもとづいているが、話し言葉での場合は事情が異なる可能性も考えておかななくては行けない。

今までの議論では、四字動詞の元になる表現としての二字の漢語+二字の漢語という組み合わせで例えば「事情聴取」にみられる目的語と動詞の文法関係が不透明になり、新たな一つ概念としてリセットされて名詞か動詞の定義を経由して四字動詞が確立したという仮定のもとで議論をしてきた。その考えのプロセスを図示すると以下ようになる。



このプロセスと平行して最初から名詞としての用法が確立している四字の漢語が四字動詞の用法を確立するタイプを検討してきた。この四字動詞の確立には動詞の意味概念が拡大していくという背景があると思う。^{xi}詰まり、一つの状況を分解的に表現するのではなく、全体としてまとまった状態・出来事を表そうとする要請があると考えられる。いずれにせよ、二字からなる構成単位が四字になって長くなるという形態的特徴は共通している。特に、動詞の解釈が元になる句構造表現で可能な場合、四字動詞自体が手段としての役割をコンテキストから持ち込める事が新たに目的語をとれる契機を作るという考え方を検討してきた。今までの考察では四字動詞の確立には何らかの文法的関係をその根拠にしていた。しかし、単に漢語が連続して四字からなる表現単位がその使用状況から臨時的に動詞の用法を確立しているという場合を検討してみる。

例22 かけめぐって「事実調査」し、...

『アメリカ強制収容所』

例22での四字動詞「事実調査する」は筆者の直感では受け入れ難い。少なくとも「事実調査をする」という目的語として使われた名詞表現を経由して動詞用法が確立したとする見方よりも当該のコンテキストを背景に臨時的な用法として用いられているという見方で説明し易いタイプである。^{xii}「調査」の部分に動詞の解釈を読み取り、先行する表現の「事実」をその目的語として全体で動詞句のレベルを認知するよりも、全体であるまとまった状況・事態を表し、それを「動き」をもつ対象として表すために四字動詞で表現していると考えられる見方が可能である。

例23 藤井氏が直接主張するかたちに...

『学校崩壊』

例23では、前後のコンテキストから「自ら主張する」の意味で用いられている。しかし、特定の分野で「間接」・「直接」を用いて対比的な概念を表す状況・事態が生じれば四字動詞の成立要因になる可能性が存在する。^{xiii}もう一つの見方として、単に「直接、主張するかたちに、」という表現が句読点の略により四字動詞の如くみえるに過ぎないとも考えられる。しかし、

この隣接する二字漢語同士が頻繁に使われることにより当該のコンテキストを背景にして一定の解釈を与えることにより、その解釈が意味的なまとまりをもち結果的に四字動詞の表現が確立するというプロセスを考えることも可能である。^{xiv}

例24 『聖衣』(アメリカ)が輸入公開されており、... 『日本のマス・コミュニケーション』

例25 パリで一般公開されたのは... 『日本のマス・コミュニケーション』

例24では「輸入して公開する」という、第三のタイプとしてあげた並列する二字の漢語の関係を元に四字動詞の成立を説明する根拠には難点がある。その一つとして「輸入する」と「公開する」という二つの出来事を日常的に密接な繋がりのある出来事として結びつける状況を世間的な知識の枠では考えにくいことによる。従って、この四字動詞の用法はコンテキストに助けられた解釈にたよる臨時的な用法とする見方が可能である。^{xv}同じ資料からとった「一般公開する」の用法では、「一般公開」という確立した表現をもとにしていると考えられる。「一般に公開する」という句も第一のタイプとしてあげた副詞+動詞の関係を反映している。更に、「一般公開」と対照される四字の漢語の類として「特別公開」、「限定公開」などの表現があることも確立した四字漢語の表現であることを示している。対照的な表現の系列があることは、一時的・臨時的なレベルを越えて確立した表現になっていくステップの一つと考えられる。そして、その同位語的表現は名詞用法の確立に組している傾向が強いと想定される。その理由として、同位語的な認定される場合、その同位語の集まりの全体は分類的な基準を持っていると考えられる。最初から、動作の細かい差異を表すために四字漢語からなる動詞表現が派生したとみる考え方には組しにくいと思う。^{xvi}ある対象を分類するラベルとして同意語的な表現が適用され、即ち名詞用法が確立して、更に、動詞用法への拡大がなされたとみる見方ができる。唯、最初から四字動詞として認知されたものが名詞としての認知が先にあり後で四字動詞の確立がなされかたについては更に検討する必要がある。一般的な傾向として、動詞は字句の数が少ないことから名詞から四字動詞が確立した見方が有力と思われる。次に、四字漢語では格助詞「を」を用いる名詞用法が一般的に可能なことである。具体的には、「一般公開をする」、「輸入公開をする」という名詞用法の表現の方が対応する「一般公開する」、「輸入公開する」という表現の分布に対して文法性のバラツキが少ないことによる。

今までは、四字動詞の確立を促進する要因をそれ自身、即ち、元になる表現の意味的關係やコンテキストとの関連性に求めてきた。最後に、四字動詞を取り巻く形態的側面との関係から検討する。即ち、「させる」のような使役表現をつくる接辞や「する」のように名詞について動詞表現をつくる接辞である。まず、使役表現から検討する。

例26 ヒトの感性を拡大変容させるシステムなのだ。 『マルチメディア』

例26では「拡大」と「変容」からなる漢語表現が連結して四字動詞として使われている。しか

し、「拡大変容」という連結表現は名詞としてもまた、「する」をつけた動詞としても一般的でない。しかし、使役の意味をつくる接辞「させる」を用いた四字動詞は特に不自然ではないように思われる。見方を変えれば、接辞「させる」は限定的ではあるが動詞用法を確立させる一つのステップを与えているともいえる。^{xvii}

例27 お坊さんが商売商売していて... 『日本人よ日本文化』

例28 どっとアメリカへ頭脳流出する。 『アジア系アメリカ人』

例27は文章語でしかみられないであろう四字動詞の例である。漢語の重ね合わせによる表現と動詞をつくる接辞「する」からなる臨時的な用法である。二字の漢語を組み合わせて四字の漢語をつくり接辞「する」をつけることによるのみ四字動詞の形態的特徴をつくっている例である。逆に言えば、四字動詞の形態的な構造の条件を利用した例である。

例28では「頭脳流出」という概念が名詞概念として確立している。そのような状態に至るプロセスに解釈を与えるために接辞「する」をつけて四字動詞を確立させている。また、同じ系列にあげられる受身の接辞「られる」も四字動詞を派生するのに形態的な要因を提供している。

例28 プログラムのファイルが自動生成されるから、 『スーパーパソコンの時代』

例28は受身の接辞「られる」を用いて限定的に使用される四字動詞を派生している。限定的というのは、対応する能動形「自動生成する」を前提にはしていないことである。つまり、接辞「られる」を用いて特定の意味的様相を動的にとらえる機能を与えて四字動詞をつくりだしているのである。

要約する。二字の漢語を単位として対にして四字からなる形態的条件を利用して四字動詞の形成の可能性を検討してきた。四字からなる漢語の形態枠にはめて派生を可能にしているというよりも、二語の漢語からなる構成単位で、その意味的な内部構造の関係を不透明化して、二語の漢語からなる構成単位を対にして拡大的に新たな語形成の条件があることを前提にその要因を分析してきた。具体的には、四字からなる漢語の枠では、例えば、全体では手段というような新しい意味的機能を持たせることが語形成の要因として抽出した。その背景には、二字からなる漢語要素同士で、相互の意味関係の固定化（＝希薄化）が考えられる。つまり、意味的な概念の拡張である。名詞経由の四字動詞では、例えば専門用語として確立している概念を動詞として使うという要請が要因と考えられた。その背景には、まとまった意味概念に対して動的な側面をもたせるという要請が考えられる。この二つのタイプに共通な背景的条件として、漢語という形態的手段を増やして動詞を形成する要請である。つまり、形態的手段の拡張である。但し、以下の例のような五字以上の漢語からなる動詞は稀であり、かつ形態的な特徴を反映した生産的な型ではない。^{xviii}

例29 新聞記者会見した。 『日本を売り込め』

-
- i 私家版『四字の漢語からなる動詞』2005年
- ii 「非富裕層」のように、一語(=「非」)+三語(=富裕層)のような組み合わせは分析対象にしない。
- iii 「自主的な運営」のように名詞句を基底にすれば名詞の範疇に入ることが明白である。
- iv 影山太郎『文法と語形成』p.193.
- v 「自己の描写」という類の名詞句を基底に想定するのは難がある。
- vi 「歯をくいしばり、腕を握りしめる」の意。
- vii 動詞と認定して目的語をとると説明するのではなく、項構造の枠を満たすので逆に動詞と認定するという逆の認定の仕方になっている。
- viii 「写真」を残すとすれば「とる」を使い「写真をとる」の法が自然である。「撮影する」を残せば、「写真」は省略できる。詰まり、「写真を撮影する」とう表現は意味の関係を表すためには適切だが、実際の用法では使いにくいといえないだろうか。その分、名詞用法が確立しているといえる。
- ix 「合格できる」とはいうが「勉強できる」とはいわない。
- x 95%の精度を得るためには、一つの事例に関して384サンプルが必要である。
- xi 逆に言えば、元の動詞の意味内容が希薄になって、結果的には単語を連ねて動詞の意味を維持するという見方もある。
- xii 引用符もこの字句を強制的に用いている事を示し、臨時的な表現であることを補足している。
- xiii 英語では通信手段の多様化にともない、mailの概念が種類の拡大して、voice mailやe-mailのような表現形式がでてきた。結果として普通の郵便はsnail mailとかmail mailの表現が出てきた。この場合最初のmailにアクセントを置く必要がある。
- xiv 英語と対照して、表現単位の統語的関係の制限を受けにくいタイプの語形成が日本語では有効であると考えられるがこれは別の機会で論証する。
- xv このコンテキスト的な状況とは当該の業界内では「輸入」と「公開」とは結びつきやすいという背景情報を想定することである。
- xvi 同様な意味概念を持つ短い表現で置き換えればより簡明だから、四個の漢語を使うことに必ずしも固執する必要がない訳である。
- xvii 「お茶する」のような名詞につけて動詞をつくる「する」に対して、使役の接辞「させる」はその意味内容からしてより強力な動詞形成の形態的機能を与えるのかもしれない。つまり、「する」は名詞の意味内容に動詞用法の確立条件を依存しているのに対し、「させる」はそれ

四字動詞の研究

自身が動詞用法の確立条件を意味内容の側面から与えていることになる。

^{viii} 見方を変えれば、「する」は接辞という性格よりも動詞を形成するのに核となる機能を果たしていると考えることが可能である。即ち、「する」はheadであり、その補語的な機能を果たす対象として四字の漢語を要求するとも解釈できる。

参考文献

- 影山太郎 1993 『文法と語形成』 ひつじ書房。
Taylor, John R. 2002 *Cognitive Grammar*. Oxford University press.

引用文献

- ジミー佐古田 『日米合同捜査』 講談社
司馬遼太郎 『日本人よ日本文化』
平子義雄 『翻訳の原理』 大修館書店
中村正三郎 『岩波ジュニア新書』 岩波書店
村上由美子 『アジア系アメリカ人』 中公新書
山本七平 『空気の研究』 文芸春秋
加藤寛 『とまどう日本人』 三笠書房
柳原和子 『「在外」日本人』 晶文社
高村薫 『リヴィエラを撃て』 新潮社
石田晴久 『スーパーパソコンの時代』 岩波書店
後藤光弥 『日本を売り込め』 サイマル出版会
小林信彦 『発語訓練』 新潮社
藤田博司 『アメリカのジャーナリズム』 岩波新書
河上亮一 『学校崩壊』 草思社
ロナルド・ジェイファー 『アメリカの日本空襲にモラルはあったか』 草思社

日本経済新聞